

立原正秋全集

第四卷

立原正秋全集

第四卷

角川書店

立原正秋全集 第四卷

昭和五十八年十月十二日初版発行
昭和五十九年六月三十日再版発行

著 者 立原正秋

発行者 角川春樹

印刷所 新興印刷株式会社

製本所 株式会社鈴木製本所

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二―十三―三

電話 ○三―二三八―八五二一 営業部
○三―二三八―八四五一 編集部

振替東京三―一九五二〇八 二一〇二

Printed in Japan 0393-573404-0946(0)



立原正秋全集 第四卷 目次

花のいのち

五

死の季節

二五

銀婚式

二六

焼けた樹のある風景

二七

流鏑馬

二七

雨

二九

トランプ遊び

三一

女の店

三五

最後の仕舞

三三

春の病葉

三七

解題

武田勝彦
四五

花
の
い
の
ち

第一章

一

鎌倉と藤沢を結んでいる江ノ島電車の鵜沼駅を降り、海岸の方に向ってしばらく歩くと、十字路にでる。十字路を右にまがって百メートルほど行くと、左側の門構えの内側に、一本の大きなユーカリ樹の見える屋敷がある。そこが窈子の婚家先であった。

そのあたり一帯はすべて高級屋敷街で、どの家の庭でも松の木が豊富だった。それだけに、ユーカリ樹の見える窈子の家はすぐ目についた。荒く刻んだ御影石の門柱には、柚木正宏と書かれた標札がかかっていた。窈子の夫の名である。鉄の棒を抽象風な絵のように組みたてた斬新なデザインの門で、その向うに家が見える。家も、ゴシック様式を現代風に簡素にしたもので、それでも穹窿の鋭い屋根が目立った。

この家の東側に、門も別になっている柚木正宏の生家がある。東洋石油会社の取締役社長である柚木伊助は、昭和のはじめにここに居を定めたが、息子が妻を迎えるにさいし、母屋とは別に新しい家を息子夫婦のために建ててやったのであった。いまから三年前のことである。しかし母屋と新夫婦の家は庭続きになっていた。

柚木正宏と窈子は見合結婚であった。正宏三十四歳、窈子二十三歳の秋のことである。そしてあくる年の秋のはじめ、二人の間に女の子がうまれた。

金木犀が匂う秋晴れの午後、窈子の家の庭で、えいッ、やあッ、という掛けごえがあがっていた。いずれも二十歳の娘達が四人、窈子に薙刀を教わっているところであった。窈子は薙刀四段の腕前であった。

「志賀さん、右腕をもうすこし後ろに引いて締めなさい」

窈子から注意された志賀三千代が、薙刀の柄を握った右腕を心もち後ろに引いている。

近代的な高級住宅が建ちならんでいる鶴沼のこの一角で、毎週土曜日の午後になると、薙刀を練習している声があった。窈子に薙刀を教わりに来る娘達は、いずれもしかるべき家の子女であった。

戦争が終ったのは二十年前であった。以来、日本の婦道は廃れて久しかった。草木がなびくように、日本全体が民主主義をとなえていた時代、若き歌人鍋島克之は、息子の克一、娘の窈子に、徹底的に古風な教育法をほどこした。古風な教育法といっても、歌人であったから、雅の道を心得ていた。彼は息子と娘に剣道と薙刀を教え、三十一文字を教えた。

窈子は、その父から無形のものでいろいろなことを学んだ。

いま、澄みきった秋の空に、薙刀を練習する娘達の声が高くあがっていた。

「はい、今日はこれまで」

窈子の一言で四人の弟子達は練習をやめた。

それからにぎやかな一刻がはじまる。娘達は鉢巻をとり稽古着をぬぐと、若く美しい師を囲んで茶菓子の前にしばらく歓談する。

娘達はみんな窈子にあこがれていた。軀も心も華麗、という一語に尽きる窈子には、若い娘達を惹きつけてはならない個所があった。彼女達にしてみれば、窈子の結婚生活は理想に近いかたちであった。彼女達は、窈子の夫の柚木

正宏にも何度か会ったことがある。東洋石油会社といえど財閥だった。その一人息子の寵愛を一身にあつめている。盗子に羨望の目を向けるのは当然かも知れなかった。

盗子を囲んだ娘達の話は華やかだった。木の葉が落ちてもおかしいと思う年頃である。話は尽きなかった。

やがて時間がきて、娘達は来週の土曜日を約束し、盗子の家を辞して行った。

娘達が帰った後、盗子はいっときのあいだぼんやり庭を眺めた。二歳になる娘の久美子は、母屋の祖母のところに行ききりであった。姑の定子は、一人孫を可愛がってはなさなかった。久美子が父母のもとで泊った日でも、朝になると早々に迎えにきて連れて行った。つまり、一日のうち三分の二以上を盗子は自分の娘と顔をあわせずに過していたのである。夫の正宏の帰宅時間はきまっていなかった。したがって盗子は一日のうちの大半を手持ち無沙汰な状態で過さねばならなかった。そんな一刻、ふっとしのびよる虚ろなときがあった。

不平不満があるわけではなかったが、なにかが欠けている、と盗子はそんなときに考えた。なにが欠けているのか、それは自分でも判らなかった。夫の正宏は、尊敬に値する人物であった。官立大学の経済学部を出てドイツの大学に学び、いわゆる秀才コースを歩いてきた典型的な男であった。十一歳の年齢の開きはさした障^{しょうがい}碍ではなかったが、夫婦のあいだには何かが欠けていた。それは、盗子が、虚ろになる一刻、なにかが欠けている、と思う気持ちとつながっていた。

やがて暮れ方が訪れてきて、盗子は女中といっしょに台所に立ち、食事の支度をはじめた。

盗子は支度をしながらも、夫は今日は早く帰宅するだろうかと考える。そう考えるのがここ数か月の習慣になっていた。日によっては夜半の二時頃に帰ることもあった。もちろん夕方帰宅する日がなかったわけではない。しかしそれはここ数か月のあいだ数えるほどしかなかった。

十一月なかばのある日の昼すぎ、窈子は、肉を配達にきた肉屋の小僧が、ここの旦那さんも別宅のお子さんが病氣じゃ大変ですね、と女中に言っているのをきいた。

窈子はそのとき台所に水をのみに居間から出たところで、台所の入口で小僧の声をきき、足をとめた。

「しいっ、つまらないことをしゃべらないで。そんなことがこの奥さんのお耳に入ったらどうするの」と女中の幸子が小僧を制してした。幸子は、窈子がくる前から母屋にいる本年三十八歳になる女中だった。

「ついくちに出ちやうよ。だって目と鼻の先に別宅があるだろう」

「後であなたのお店に行き、小僧達にそんなことを言いふらさないようにきつく言っておかなくちゃ」

「はいはい、どうも済みません」

やがて小僧が帰る気配がした。

「幸子さん」

窈子は台所の入口で女中を呼んだ。こっちをふり向いた幸子が驚いた目を見せた。

「ちょっとわたしの部屋にいらっしゃい」

窈子はそう言いおいて自室に戻った。

幸子が来たのはそれからしばらくたってからだだった。彼女はおずおず部屋に入ると、入口にかしこまって坐った。「もっとこっちにいらっしゃい。その椅子に掛けてちょうだい」

窈子は自分の前の椅子をさし示した。居間の廊下は広く、そこに安楽椅子をおき、庭を眺めるようになっていた。幸子はおそるおそる歩いてきて椅子にかけた。

「あなたたからきいたとは言いませんから、別宅のことを話してちょうだい」

幸子はおだやかに言った。幸子はうなだれていた。

「お話できないの？」

「はい、あのう、つまらないことをお耳に入れて申しわけないと思います」

「つまらないとかなんとか、そんなことではないのよ。あなたの責任ではないでしょう。別宅のことを話しなさい」

しかし幸子はうなだれたきり黙っていた。

「では、わたしが訊きますからそれに答えてちょうだい。……別宅はどこにあるの？」

「はい、海岸駅の近くです」

幸子は絶えいらんばかりの小さい声で答えた。海岸駅というのは小田急電鉄の鶴沼海岸駅のことであった。

「その別宅はいつからあるの？」

「はい、奥さまがこのお家にいらっしゃる五年ほど前からだと思います」

幸子は観念したのか、今度はすらすらと答えた。

「どんな人なの？」

「はい、私、おあいしたことはありませんが、なんでも藝者だった人だそうです」

「子供は何人いるの？」

「たしか三人とか、これもお肉屋さんの小僧さんの話ですが」

「それで、母屋ではもちろん、そのことを知っているのね」

「はい……でも、奥さんをここにお迎えするとき、大旦那様が、手を切らせただけですが、……そこところはよく判りません」

「あなた、その別宅の場所を知っているでしょう」

幸子は再びうなだれたが、だいたい知っております、と答えた。そして彼女は海岸駅を降りて藤沢の方に向って歩

き、左側の公会堂の近くだ、と語った。女の名は磯野照子というそうであった。

窃子は幸子がさがった後、しばらく考えていたが、着替えをはじめた。

家を出たのは二時すぎだった。窃子の家から海岸駅までは歩いて十分ほどの距離だった。

磯野という標札がかかっている家はすぐ判った。その家は商店街のすぐ裏手にあり、竹の井戸目垣をめぐらした四間くらいの大きな構えだった。

窃子は玄関をあけ、案内を乞うた。しばらくして、五つくらいになる男の子が出てきた。窃子はその子を見たとき眩暈がした。夫の正宏に瓜二つの顔だった。

「坊や、お母さんは？」

「いるよ」

それから子供がひっこんだと思ったら、女が出てきた。三十歳をすこし越えたと思われる女は、かなりきれいな顔立ちだった。

「突然お邪魔しました。わたし、柚木です」

すると女の顔がすうっとさがった。

「どうぞおさがり下さいませ」

女はやわらかい物腰で立ちあがると、なかに入ってしまった。窃子は玄関に入った。そして、ちょっとためらってから、式台にあがった。入口が二畳の間で、襖の向うに六畳の間があり、女はその部屋の間壁に坐っていた。

窃子は磯野照子と向きあって坐ったとき、不思議なことだったが相手にたいしての憎しみが湧いてこなかった。照子は顔を伏せ、小さくなっていた。

「お子さんが御病気とか……」

「はい……もう、よろしいのです。でも、誰方がそんなことを……」

磯野照子の言動には節度があった。それは、性来のものらしかった。

「知らないのは、わたしだけだったのです」

「申しわけございません」

「いいえ、あなたがあやまることはありません。あなたのことを知っていたら、わたし、柚木のもとには参らなかつたのです」

「はい、一度は別れさせて戴いたのですが……」

「柚木の方から、また通いだしたのですね」

「はい……でも、わたしが悪かったのです」

「お子さんは三人とか……」

「はい、上が小学校にあがったばかりです。三人とも男で、下が二つになります」

二つといえば、久美子と同じではないか、と窈子は、その下の子のうまれた月をきいた。

「はい……十月でございます」

すると久美子と同じ月であった。夫は、わたしと新婚生活をしながら、かたわらここに通ってきたことになる。しかし目の前の女を恨む筋合はなかった。このとき窈子は、むしろ、目の前の女に同情していた。本来ならこの女が妻の座につくべきであったろう。磯野照子と向きあっている、それ以上話しあうことはなさそうだった。自分より以前に柚木正宏の女であった、という事実、窈子は妙な気がした。それは嫉妬ではなかった。

「どうぞ御病氣のお子さんをお大事に」

窈子はそう言うと言席を立った。

照子は玄関の戸をあけ、丁重に頭を下げた。

窈子はそこを出ながら、やはり磯野という女が憎めなかった。そして、帰宅しながら、窈子のなかを占めてきたのは、夫に対しての不潔感だけだった。一人の男を二人の女が共有している事実からくる嫉妬はなかった。

何故嫉妬がないのか、と考えてみた。自分より先に柚木正宏の妻であったからか、そうではなかった。夫と自分の

あいだには何かが欠けている、とぼんやり考えていたことと関係がありそうだった。それにしても、なんともあつけない訪問だった。帰宅したら、幸子が出迎えてくれ、いらしたんですか？　ときいた。

「行っただわ」

「如何でした？」

「そんなきき方はおやめなさい。あなたはお店の小僧達といっしょになって物見だかい見物をしているつもりでしょうが」

窃子は言葉を荒げた。幸子は、はい、と言うと台所に行ってしまった。

窃子はこの日、台所には行かず、居間からぼんやり庭を眺めて暮れ方を迎えた。そして、夫と自分とのあいだに何かが欠けていたとすれば、それは、愛情ではなかったか、という気がしてきた。夫には妙に訳知りのようなところがあり、結婚当時、三十四歳と二十三歳のとのひらきは考えなかったが、いまとってみると、それは、愛情と関係がありそうな気がした。つまり柚木正宏には、若々しいところがなかった。窃子はいまはじめてそんなことが判ったような気がした。

四

この日柚木正宏は八時ちょっとすぎに帰ってきた。

彼は、迎えにでた妻に、話がある、と言うと、さっさと窃子の居間に先に入って行った。

「そこに坐れ」

彼の態度は威圧的だった。

窃子は命じられた通り椅子にかけた。

「今日、おまえが、磯野のところに行った話はきいた」